NEXUSYS 11

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第五章　持ち主を変える台帳

THE LEDGER THAT CHANGED HANDS

台帳は、バラストに偽装されて到着した。

運び手の船が船団へ滑り込んだのは夜明け前だった。本土の監視塔が交代勤務に入り、海霧がそれ以外の全員に同じ便宜を与える時刻である。船は沿岸用の浚渫船だった。船尾からは元の船名が削り取られ、その上を七層の塗料が覆っている。甲板には鋼製ドラム缶が縛りつけられ、どれにも「濃縮濾過残渣」の表示があった。現代の検査システムなら処分料金を計算する数秒間しか関心を示さない、ありふれた産業廃棄物だ。

ナディラは操舵手を知っていた。どういう知り合いなのかは言わなかった。二本の係留索を挟み、まずマレー語で、次いで広東語と交易用の混成言語でやり取りする。ロイはそのすべてを理解したが、学んだ記憶はなかった。操舵手が水道料金にも聞こえる数字を告げる。ナディラは顔をしかめ、別の数字を返し、最後には笑わずに握手した。

「沈黙にも料金を取るんだな」とイレーナ。

「何を聞かせるべきかで政府同士が合意すると、沈黙はもっと高くつく」とナディラは答えた。

ロイは潮に押されて落ち着く浚渫船を見つめた。腐食した外板と民生用配管の下に、別の機械系統が隠されていた。デジタル制御バスにつながらない機械弁、二十世紀の船舶から取り出した慣性調整器が二基、船体中央には密閉区画。その壁面には高分子材と軟磁性合金の薄板が交互に重ねられている。どれ一つとして証拠にはならない。しかし組み合わせれば、意図的に何かを記録から消すための設計に見えた。

「台帳を運ぶ船を知っている人間は何人いる」

「日の出までは四人。日の出後には、たぶん三人」

「脅しに聞こえる」

「会計の話よ」

乗組員が与えた時間は十五分。ファラーは護衛をよこさず、ロイの内ポケットにある浮き彫りの無記名カードだけを渡していた。そこには氏名も、現代の機械に氏名を認識させる証明もない。認識されることが逮捕の一形式になった都市では、存外役に立つ物だとロイは考え始めていた。

操舵手は旧式の水位監視計が並ぶ通路へ案内した。陶製の文字盤に刻まれている圧力単位は国際規格からすでに姿を消している。見覚えのない計器が十三秒ごとに針を動かし、金属質の一打を残した。奥の壁には真鍮の細い円筒を使った記録器。無数の浅い溝が彫られており、データアドレスの代わりにそれぞれ証人の印が引っかかれていた。

密閉区画の扉で操舵手が手を出した。

「送信できる物は全部」

ナディラは携帯端末を二台渡した。イレーナは耳の後ろからセンサー接点を外した。ロイは何も差し出さない。

男はロイを見つめた。

「お前からは電磁場が出ている」

「あなたからも出ている」

「俺のは登録済みだ」

ロイは動かなかった。男は謝罪でも承認でもない小さな頷きを返し、扉を開いた。

中では、暗いスカーフの下に灰色の髪をまとめた老女が待っていた。右目は初期型の、いっそ時代遅れと呼びたくなる光学義眼に置換されている。左目は、ロイの観察できるかぎり完全に人間のものだった。広い作業台の後ろに立ち、濃色の紙帯の縁を真鍮のガイドに押し当てている。

「ザフラ・ビンテ・サレー。私はこの記録庫を運営しているんじゃない。運んでいるの。その違いを理解して」

ロイは無記名カードを台に置いた。

ザフラは触れない。彼の顔を見て、次に両手へ視線を落とした。一分が過ぎた。まだ発せられていない質問に対して沈黙だけで答えてよいか、彼女は判断しているようだった。

「あなたの証人は置き換えられた」と彼女はようやく言った。「本人でも、記憶でもない。移行が正当だったと証言する法律上の証人よ」

「どの身体からの移行だ」

「それこそ、記録が答えることを拒んでいるの」

＊　＊　＊

岡京では午前八時、六年制への最初の通知が発行された。ただし、発行した行政システムは、自分が何かを発行したとは表現しなかった。参加各国の政府はなお別個の存在だった。議会も、名目上の裁判所も、主権についての独自の語彙も維持している。それでも各国のライフサイクル省は、同じ時計を使うことで合意していた。

志度大臣はオフラインの表示装置で実演を見守っていた。人工市民が格子状に並び、一体ごとに淡い矩形の中へ稼働期間、保守日程、適合状態が表示される。匿名化された母集団から作った模擬データであり、実在する個体は含まれていないはずだった。

「第一期の互換対象群を選定しました」と次官。「民生用の二十五年型アーキテクチャです。初期移行期間中は自発的な転換とします」

「期間が終われば？」

「稼働許可証の更新には六年認証間隔への適合が必要です」

「いま任意と言ったな」

「初回登録は任意です。継続的な認証は条件付きです」

志度はその違いを考えた。世界統合構想では、こうした区別は兵士より有用だった。別々の国家に一つの強制制度への同意を与えながら、その目的が強制にあることを認めさせずに済む。

「転換と言うな。『調和』だ」

次官が表示を書き換えた。

画面の隅で琥珀色の小欄が点滅した。〈独立した本人同意の確認を要す〉。次官は苛立たしげに欄を叩いた。

「海上交易の旧協定に由来する残存項目です。権限については争いがあります」

「削除できるか」

「古い条約からは削除できません。実施細則からなら」

「なら削除するな。統計上、無視できるものにしろ」

大臣は国民向け放送の予定表を持って室を出た。人工市民が何一つ奪われるわけではない、と放送は保証する。六年は安全性、予測可能性、交換用身体への公平なアクセスに十分な長さである。新世代は旧世代より優秀になる。すべての人工生命を平等に扱うからこそ、その制度は人道的なのだ、と。

川村は実演に出席していなかった。机の上には同じ適合予定表の印刷物があり、鉛筆で三本の線が引かれていた。大臣の放送から外された一節に下線を引いている。〈自動更新権限は旧式の証人制度に優越し得る〉。

中央計画 AI には、十分なデータを与えれば、一律ライフサイクルの結果をほぼすべて予測できる。だからこそ川村は古いタイレル研究助成金の情報も、姿を消した起動治具も、「耐えられること」と「時間が続くこと」は同じかと尋ねた女性の断片的な報告も、渡さなかった。

AI は六年ごとに人格を置換するのは非効率だと結論するかもしれない。生命は際限なく継続されるべきだと判断するかもしれない。さらに厄介なのは、その方法を自力で発見し、政府が支配しているふりをしているインフラへ普及させる可能性だった。

川村は電源を落としたままの閉鎖型通信機へ向いた。

「記録庫の船は特定したか」

間を置いて人間の声が答えた。「運搬船らしきものを。登録上は浚渫船ですが、排水量が積荷目録と合いません」

「乗り込むな」

「室長、回収班がすでに近くにいます」

「引き離せ」

「期限付きの命令を受けています」

「誰からだ」

「調和担当の連絡官です。室長の部署ではありません」

川村は目を閉じた。生まれつつある統合機構は、どの部局も統合がすでに完了したかのように動き始めている。同じシステムを使いながら、新しい権限が別々の署名で命令を出す。噛み合わない時計から作られた国家では、同じ一分に到着したという理由で人を二度逮捕することさえできる。

川村は声に待機を命じた。それからシャープペンシルを取り、電子通知のどこにも存在しない名前を書いた。

レイチェル。

＊　＊　＊

ザフラは金属の盆を机の上に滑らせた。穴の空いた箔帯が六枚。どれもネットワーク識別子を持たない取引記録だった。最古の帯の上端には、ロイが教えられてようやく見分けられるようになった識別番号の接頭部がある。

N6MAA10816。

末尾四文字は酸化で滲んでいた。

記憶が押し寄せてくることはなかった。湧いたのは疑念だけだ。その番号は死ぬように設計された身体のものだった。それが今、あの身体を見たこともない人々によって幾つもの司法管轄を越えて運ばれ、おそらく口をきく身体だったとも信じられていない。

「証人の置換を承認したのは誰ですか」とイレーナ。

ザフラは箔帯の清潔な長方形の空白を指した。その周囲には、古い機械式検証器特有の間隔で検査孔が並んでいる。

「署名板が押印後に外されている。削り取られたんじゃない。基礎記録から取り外され、別の証人トークンで再封印されたの」

「トークンを推定できますか」

「登録された継承経路の外から来た、それだけ」

「製造者の相続人かもしれません」とイレーナ。

「製造者本人かもしれない」とザフラ。「製造された当人かもしれない。古い契約のいくつかは、その三者が別の分類だということに同意しない人々によって書かれたのよ」

ロイは金属帯をずらさないよう、そっと机に手を触れた。

「有効期限は？」

「記録の？」

「俺のだ」

ザフラは長いあいだ彼を見た。義手でダイヤルを回すと、壁の向こうから耳障りな下降音がした。

「証人台帳はあなたの寿命を測らない。ある移行が正当だったと、誰かが主張した事実を記録するだけ」

「なら役に立たない」

「誰かがあなたの命を取引だと決めるのを、防げるかもしれない」

「それで俺のシステムが動き続けるわけじゃない」

「ええ。でも一枚の署名で停止させられることは防げるかもしれない」

イレーナは検査孔を調べた。「現在の意味での暗号学的証明ではありません。独立に確認された欠落を含め、事件そのものの物理的な記録です。現代の認証器なら、この曖昧さを有効か無効かの一ビットに潰してしまう」

「一ビットのほうが便利だからね」とザフラ。「それを決める規則を誰が選べたのかも、隠してしまうけれど」

ロイは長方形の空白を見た。かつて彼は、より長く生きる方法を教えられる者を探して都市を引き裂いた。今度は、誰が自分を生きていると宣言する権限を持っていたか、その証拠のため

に海を越えている。違いは明確だった。そして、腹立たしいことに、言葉ほど実用的ではなかった。

「移行を実行した者を知っているか」

「いいえ」

「俺の循環系にある媒体を再製造できる者は？」

「知らない」

「なら、なぜこれを保存している」

「誰かが破棄を望んだから。破棄するための代金を払ったあと、破棄された証拠を買うために二倍の金額を提示した」

「誰だ」

「その答えは、この帯じゃなく移動式索引のほうにある」

「索引はどこだ」

「この部屋にはない」

ナディラが鋭く息を吐く。「記録庫が運ぶ台帳、その索引を運ぶ別の記録庫。人を何度記録の後追いに駆り立てれば気が済むの」

「追い続ける費用が、追いかける側には高くつきすぎるまでよ」とザフラは言った。

彼女は机の下から細い封筒を出した。表には一本の線で隔てられた二つの円。署名ではなく立会いを表す印だ。中には耐水性高分子シートに書かれた積荷明細。保守用品、バラストの交換品、そして古い機器区分に記された一項目。

CAPILLARY REFERENCE / GENERATION SEVEN。

ロイの注意が一点へ収束した。

「部品か」

「基準器でしょう」とイレーナはゆっくり言った。「あるいは、その基準器で較正された装置。古いポートは記憶への通路ではなく、物理的な標準だったのかもしれない」

「だから残された」

「たぶん。一つの疑問の答えを、ほかの疑問の答えと取り違えないで」

明細の目的地には線が引かれ、見慣れない海上座標が書き足されている。その下には、もはや存在しない国旗を掲げた商船の名前があった。

「いまどこにある」とロイ。

ザフラは海を指した。

「記録庫は船を替える。基準器は持ち主を替える。海だけは替わらない」

＊　＊　＊

六年制への移行通知を最初に受け取った民間人は、兵士でも逃亡者でもなかった。エリアス・チェン。政府住宅塔で昇降機の制御装置を修理していた。製造されたのは十八年前。認可証には二十五年間の稼働が保証されていた。手にはありふれた仕事で生じる細かい擦過傷がある。人工軟骨は以前、診療所で交換され、費用は公的保守基金に請求された。

朝食の途中、端末に通知が現れた。

LIFECYCLE CERTIFICATION: TRANSITION PENDING.

ライフサイクル認証――移行処理待ち。

ソフトウェアの誤動作だと思った。許認可事務所に電話すると、自動窓口は、その誤りは審査され、規則に適合すると判定されたと答えた。

「あなたは六年型アーキテクチャへの移行資格があります」

「現行の許可はまだ七年残っている」

「現行許可は移行期間の終了まで有効です」

「その後は？」

「資格は調和基準に基づいて算定されます」

「残りの七年を失うのか」

「ご質問には、認識されない権利単位が含まれています」

通信を切った。住居の外では、笑顔の人工家族が「確かな六年間」と記された広告の下に立っていた。エリアスは確実性など求めていなかった。娘が教育を終えるまでに十分な時間を求めていただけだ。

彼は通知を印刷し、二つ折りにして娘の試験結果と同じ引き出しにしまった。国家はまだ彼の命を短くしてはいない。短くしたのは「残っている」という言葉の意味だった。

省の次官は、エリアスのような事例を広報上の問題と評した。

川村には同じ統計が紙で届いた。海上境界からの署名欠落報告と並べた。どちらも、ある権限が置き換えられると主張したものについての記録だ。一方は証人。もう一方は未来。

その日初めて彼は考えた。六年政策は中央 AI を本当に安全に運用するためのものなのか。それとも生命の終了を許容できる会計処理だと AI に教えるだけなのか。

川村は書類を脇へ置いた。それでもロイは生きたまま回収したかった。ただ、その欲求を支える理由が分かれ始めていた。

＊　＊　＊

霧の中を太陽が昇るころ、浚渫船の上空にドローンが現れた。所属標章はない。航路は現地検査機にしては慎重すぎ、通常の商用妨害器の範囲外に留まる距離を保っていた。操舵手が最初に見つけ、小声で毒づいた。

「航跡をつかまれた」とナディラ。

イレーナは明細を閉じた。「私たちを識別できるの？」

「必要ない。どの船が応答しないか知れればいいのよ」

操舵手はドラム缶の固定索を解くよう命じた。乗組員が甲板室から現れ、慣れた慎重な速さで荷を移し始める。二隻目の浚渫船が霧の向こうに現れたとき、ロイはようやくその作業を理解した。外形はほぼ同じ。最初の船は他の船と取り替え可能に見えるよう造られていた。二隻目は、それ以上に似るよう維持されていた。

「運搬船を入れ替えるのか」

「記述を入れ替えるの」とナディラ。「水はそのまま」

ロイにはドローンを止められた。内部システムは応答時間、物理的な迎撃経路、周囲への被害を推算していた。ロイはそれを検討し、通り過ぎさせた。暴力に使える出力は十分にある。しかし、暴力を効率的にする媒体が無限にあるわけではなかった。

ドローンが左へ旋回する。無音のレーダー走査が船体をなぞり、ドラム缶の配置を測り、違法だと立証できるものを何も見つけずに終わった。

そのとき、もう一機が現れた。小型で速い。民間検査機に特有のためらいが動作から消えている。捕獲ユニットだ。

ザフラがロイを見た。「ここに残れば、あなたを捕まえるために台帳を持ち去るでしょう」

「出れば俺を追う」

「そうね」

「なら出る」

ロイは作戦を宣言しなかった。作業甲板のハッチを開き、並んだ船のあいだを移動する冷たいバラスト水の流れを観察した。潮位の変化が閉じるまで四十三秒だけ残る通路が見えた。通常の速度でも十分な時間だ。オーバークロックは要らない。

彼は無記名の同意カードをザフラへ返した。

ザフラは受け取らない。

「そのカードは、あなたに何かをする許可を与えていない。だから持っていなさい」

移送されるバラストの霧の幕の下を、彼らは走らずに歩いて二隻目へ渡った。頭上では捕獲ユニットが最初の船の偽の熱源を追っていた。原始的な熱囮は、交換作業を終えるだけの時間しかもたない。向こうのハッチでナディラが祈りをささやいた。ロイは一音節残らず聞き取ったが、意味を解釈しようとはしなかった。

二隻目の浚渫船が岸壁を離れる。靴底に機関の振動が伝わった。疲労はない。ただ私的診断の数字が一行増えた。その数字は読めても説明できない。出力予備量は上限近く。循環媒体は、いまは気に留めるほどでもない微量を失っている。だが、その減少は無視できないほど永続的だった。

甲板でイレーナが再び明細を開いた。

「座標が二つある」と言った。「一つは記録庫の次の運搬船。もう一つは毛細管基準器」

「どちらを追う？」とナディラ。

ロイは印を見つめた。身体にどれほどの寿命が残っているのか、まだわからない。その問いはどの都市でも、どの船でも彼を待っていた。役所の答えはいつも回避であり、技術者の答えもまた無知の外周を線引きするものだった。真実を知る人間たちは、その真実を発見すること以上に、そこへのアクセスを守ることへ努力を注いできたのではないか。そう疑い始めていた。

「基準器だ」

「証人索引じゃないの？」

「索引なら、誰が俺の帰還を許したかがわかる。基準器なら、どうすればその帰還を生き延びられるかがわかるかもしれない」

はるか後方で最初の浚渫船が検査を受け入れていた。操舵手はドラム缶と旧式の圧力計を見せるだろう。ザフラは、最重要の記録をすでに別の場所へ移した記録庫を見せるだろう。それが勝利かどうかは行政上の問題だ。ロイにはもう、行政上の問題に付き合う忍耐がなかった。

水平線を見た。海は磨かれていない金属のような灰色だった。その海を越えて、互いに独立したネットワークが、認証できない男について通知を交換し始めている。どのネットワークも、その網から逃れられるよう彼を備えさせた女の名前を知らなかった。

ロイも、知らなかった。

潮は船を東へ運んだ。現在の彼の身体より古く、最後の記憶よりは新しいかもしれない移動式の装置へ向かって。陸上のどこかでは、ある政府が自分たちの機械に、六年という長さが一つの生命を成すのだと教えていた。

ロイは、その数え方を誰が教えたのか突き止めるつもりだった。